イスラム教の国サウジアラビア

前ジェッダ日本人学校　教諭
釧路市立朝陽小学校　　教諭　松本孝也

１．はじめに・・・

サウジアラビア王国は、イスラム教の２大聖地マッカ（メッカ）とマディナ（メディナ）を有するため、周辺のイスラム教諸国よりも戒律が厳しい。一日５回のサラー（お祈り）の時間になると、街中が大音量のアザーン（お祈りをつげる放送）で包まれ、全ての店は一時閉店となり、多くの人がモスクに足を運ぶ。また、アルコール・豚肉をはじめ宗教上禁止されているものはサウジアラビアには持ちこむこともできない。女性は体のラインや顔を隠すために、黒いアバヤと呼ばれる衣装を身につけて外出する。このような日本とは大きく異なるイスラム教の習慣や文化は、生活のあらゆる部分で見たり、感じたりすることができるので、日本人学校に通う子どもたちも自然と疑問をいだいたり、関心を持ったりしていた。

ジェッダはアラビア半島の西側に位置し、紅海に面しているためマッカ、マディナの玄関口として栄えてきた。現在は多くの国際機関や金融機関が本拠を置く活気ある経済都市にもなってきている。成長を続ける街には欧米式のショッピングモールや大規模スーパーが次々と建設され、多様な民族が共に働き、暮らしている。人口はおよそ 350 万人にもなり、首都リアドに次ぐ大都市となっている。

一般的な治安はイスラム教の教えによる厳罰主義等が抑止効果となり、欧米諸国に比べ良いと考えられているが、気候は高温多湿で、ジェッダは一年中気温が高い。冬は比較的すごしやすい気候となるが、夏は 40℃を超える日が多く、湿度も高くなるため、外での活動が制限されてくる。

公用語はアラビア語であるが、多様な民族が共に生活しているということもあり、英語が多くの場所で通じる。アラビア語圏の人々同士はアラビア語で会話しているので、アラビア語しか通じないこともあるが、この地で働き、生活するために“英語を書くことはできないが、話すことはできる”という人が多くいる。

また、海水淡水化プラントにより生活用水は比較的豊かで、市内の至る所に熱帯性の植物が繁り、郊外に土漠が広がる土地とは思えない緑豊かな美しい街でもある。厳格さと寛容さ、伝統と近代化、歴史的建造物と野外アート、生命豊かな紅海と土漠等様々な顔を持つジェッダでは、日本では体験できないことが多く、新しい発見も多くある。

２．サウジアラビアでの生活に関わって・・・

ジェッダに住む日本人の多くは、外国人集合住宅（コンパウンド）に住んでいる。警備の面から考えても一番安全であり、コンパウンド内ではイスラム教の制約に縛られることもないので、比較的自由に

生活することも可能である。コンパウンド内には、生活に必要なスーパーマーケットや幼稚園などもある。テニスコートやプールなども豊富にあり、娯楽施設がほとんどないサウジアラビアの中では、余暇を楽しむために活用する人が多くいる。室内も広く、ガスや水道、電気も完備されているので、炊事や洗濯は、日本と同じように行うことができる。

しかし、コンパウンドから一歩外にでると、厳しい制約が待っている。特に女性は宗教上の制約で肌を出すことができないため、アバヤとよばれる黒い衣装で身を包まなければならない。アラビア圏の女性の多くはアバヤをまとうだけでなく、頭や顔も隠し、目だけを出して外出する。このような服装なので、多くの人は暑い日中は家の中で過ごし、日没後にショッピングにでかける。ショッピングモールなどは日本と比較すると驚くほど夜遅くまで開いている。

生活必要品の買い物は、街に数多くある大規模スーパーに行く。野菜や肉（もちろん豚肉以外）は比較的安価で購入することができるが、品質は時期によってさまざまであった。また、日本食はほとんど見ることがなかったが、近年少し日本食を置くスーパーもでてきている。梅干しやのり、みそ、たまり醤油、レトルトの味噌汁、餅などを見たことがあったが、やはり値段は高価であったり、見た感じでは、品質も決して良いとはいえなかったりだ。韓国系のスーパーにも日本食が置いてあるところがあったが、不定期であったため、なかなか欲しいものが手に入らなかった。しかし、私が赴任した時よりも、帰国する直前の方が、種類も量も増えていたのではないかと思う。日々の食事は、米やパン、野菜・果物、肉が手に入るので、それらを使って食事を作る家庭が多いのではないかと思われる。また、海沿いに位置するジェッダには、フィッシュスークもあり、比較的新鮮な魚介類も手に入れることができた。

ｼﾞｪｯﾀﾞのｽｰﾊﾟｰﾏｰｹｯﾄ

３．イスラム教の国

イスラム教の教え『六信五行』の中に“断食（サウム）”と“巡礼（ハッジ）”と呼ばれる特徴的なものがある。毎年行われるラマダン月の断食と、ハッジ月に行われるマッカへの巡礼は、大きなイベントと呼んでも過言ではなく、この時期はジェッダの街も大きく変化する。

（１）ラマダン中の生活

イスラム教の教典『コーラン』には、「ヒジュラ暦の９番目の月は日中の飲食を完全に立たなくてはならない」と書かれているので、ラマダン月の断食は“義務”と言っても過言ではないと考えられる。食事はもちろん、水も口にしないどころか、唾を吐き出すムスリム（イスラム教徒）もいる。では、なぜ断食するのか？それは、欲望をおさえるため、そして飢えで苦しむ貧しい人々の苦しみを共感するためだそうだ。学校現地職員のアフメド氏は、「ラマダンの断食を成し遂げることがとても幸せなことだ」そして「幸せを感じている大人が、幸せを子どもに分けてあげる。だから子どもたちも幸せになれる。」という話をしてくれた。『断食＝つらい・苦しい』　と考えていた私にとっては、『断食＝幸福』という

考えに大変驚かされ、断食には神秘的な意味合いがとても強いものであると感じさせられた。

ラマダン月の人々の生活は大きく変化する。日中は閉店している全ての飲食店は日没後に開店し、真夜中まで営業している。（朝方日の出まで営業する店もあるようだ。）現地の学校は午前授業。会社も３時ごろまでしか仕事ができないようだ。日没直前に急いで家に向かうたくさんの車は、スピードも２割３割増し。そして、夜遅くまで家族親戚で、友人同士で会食を楽しむ。アフメド氏も毎朝眠そうだった。「昨日は何時に寝たの？」と聞くと、「３時だ。」と毎日言っていたが、多くのムスリムが日の出ギリギリまで起きていて、最後？にご飯を食べ、眠りにつくらしい。日本人学校は通常授業を行っていたので、アフメド氏も１２時には寝ようとするのだが、毎日友人や親せきが訪ねてくると言っていた。そして真夜中に「なぜ寝ているんだ？」と聞かれるということ・・・。

さらに、日没時に家に向かうと、交差点では、水とデイツ（ナツメヤシの実を干したもの。日本の干し柿に似た食べ物）を配っている子どもを目にした。無料で提供しているものらしく、日本人の私にも配ってくれた。少し「悪いなあ」と感じながらも、ついつい興味本位でもらってしまったが、水をもらうと、その場で飲みつくす人もいた。コンパウンドの入り口にいる警備員も、日没後には、笑顔で食べ物をくれる。この時間は皆とても良い笑顔、寛大な気持ちになるようであった。

ラマダン中の店を見ると“ラマダン・カリーム”という文字を多く目にする。アラビア語の「カリーム」には『寛大』という意味があり、ラマダン月は神の恵みをいつもの月よりもたくさん受けることができる月だということだ。また、「ラマダン・カリーム」は「ラマダンおめでとう」に近い意味合いで使っているということも聞いた。実際に「ラマダン・カリーム」と話しかけると、笑顔で答えてくれた。

ラマダン中にマッカへの巡礼を行うムスリムも多いようで、４００万人を記録したという新聞記事を目にすることもあった。ジェッダの人口よりも多い人間がマッカのカアバ神殿に集まったというニュースを聞いたので、テレビ中継（サウジ国営放送）を見ると、ものすごい数の人が巡礼を行っていた。私も一度マッカに行ってみたいと思ったが、ムスリム以外は立ち入り禁止で、マッカの入り口には「イスラム教徒以外の立ち入りを禁じる」という日本語の文字も入った看板があった。また、マッカにまで行かなくても、この時期はサラー（お祈り）を熱心に行うムスリムが多く、サラーの時間や回数が普段よりも多かった。アフメド氏に質問してみると、「ラマダン中は、最後のサラーの後に、EXTRA がある。」と教えてくれた。午前２時ごろまでサラーが続いている事もあった。

ラマダンが明けると、イードと呼ばれるラマダン明けの休業になる。これは、日本の正月と似ているところがあり、ほとんどの人が新しいトーブ（アラビア圏の男性の衣装）を着て、街のあちこちで“新年のあいさつ？”を行っていた。日本でも正月に新しい服を着る家が多いと思われるが、イスラム社会では、このイードを迎えると、新しくきれいな服に着替える。すごくおしゃれをしている子どもが街を歩いている姿をよくみかけた。

ﾗﾏﾀﾞﾝ中の深夜の繁華街

（２）ハッジの巡礼は何をしているのか？

ﾑｽﾘﾑが集まるﾊｯｼﾞﾀｰﾐﾅ

「ハッジ」とは、ヒジュラ暦の１２番目の月（ズール・ヒッジャ）に行われる、マッカへの巡礼の旅のことを指している。ムスリムが行うべき「五行」の一つ（『一生に一度はマッカを訪問する』）であるため、毎年 200 万人以上のムスリムが集まってくる。

ジェッダは、マッカに入るムスリムの玄関口にあたるため、大にぎわいとなる。空港や港は人であふれ、大変混雑する。近くにあるハッジターミナル（簡易宿泊施設）にも人・人・人・・・。そしてバス。このバスに乗ってマッカまで向かうとのことである。ジェッダの政治的な機能もストップ状態となる問題も起こっている。

では、マッカに集まったムスリムは何をしているのだろうか？そんな疑問をアフメド氏にぶつけてみたところ、「儀式の連続だ。」と教えてくれた。ズールヒッジャ（１２番目の月）の７日目までにマッカに到着したムスリムは、全身を洗い、爪を切り、体毛をそり、身を清める。そして巡礼儀（縫い目のない２枚の布）に着替え、カーバ神殿に集まるということだ。そして、神殿の周りを左回りに７周する。次にカーバ神殿から数百メートル離れた「マルワ」「サファー」という２つの丘の間を３往復半する。８日目には、カーバ神殿から２０ｋｍ離れた「アラファート」の野に移動。９日目の昼ごろまでには到着するが、２００万人以上のムスリムが一斉に移動する光景はものすごいものであると言われている。「アラファート」の野では、そこにある「ラフマ山」で、日没までずっと立ったまま「我、神の御前にあり」と唱え続けるそうだ。この日は巡礼が最高潮に達するようで、日没後は、再びマッカに移動する。１０日目に、マッカ郊外の「ミナの谷」に戻る。そこには、「ジャムラート」とよばれる悪魔を象徴した３本の柱があるので、それに対して、石を７個投げる。これは「悪魔払いの儀式」と呼ばれている。その後、巡礼を全て済ましたムスリム達は、巡礼の成功を祝って羊やヤギ、ラクダ、牛などを食べるということだ。

ﾏｯｶ、ｶｰﾊﾞ神殿に集まるﾑｽﾘﾑ

これが巡礼の全てであるが、本当に儀式の連続であり、これを２００万人以上のムスリム達が一斉に行っている事を考えると、イスラム教の教えの強さ・深さというものを考えさせられてしまう。しかし、問題も多いと聞く。アフメド氏に「巡礼にいくのか？」と尋ねたところ、「No！」という答えが返ってきた。熱心なムスリムであるイエメン人のアフメド氏が、「なぜ、行かないのか」不思議に思い、その理由も尋ねてみると、「この時期は、宿泊施設の値段がものすごく上がる。とても泊まることができない値段だ。」とのことだ。経済力がある人だけしか巡礼に参加できなくなってきている現状があるようだ。また、巡礼に来て、そのままジェッダに残る人も多く、サウジ政府も不法滞在として問題にしている。近年は、この取り締まりをかなり強化しているとのことだ。さらに、毎年、巡礼に来て、マッカのカアバ神殿や、ミナの谷での「悪魔ばらい」の最中に亡くなる人も多いと聞く。

ムスリムの人たちにとっては、何でもないことかもしれないが、日本人の私たちから見ると、いろいろな意味で「すごい」と感じてしまう。その中でも、私自身が一番に感じたのは、「宗教」というもの

のすごさだ。神を信じ、教えを信じているムスリムは世界にはおよそ１２億人もいると言われている。世界の人の５人に１人がムスリムだと言える。この人数の多さからも、イスラム教には「何か魅力がある」と考えざるを得ない。しかし、私自身は感じることはできなかったが・・・。

４．ジェッダ日本人学校の教育活動

ジェッダ日本人学校は、一時期８０人もの児童生徒が在籍していたが、湾岸戦争やテロ事件、イラク戦争などを機に、児童生徒数が減少。平成２１年度は６名にまで減ってしまった。しかし、児童生徒に「数多くの体験を・・・」という意識を常に持ち、特色ある教育活動づくりに取り組んでいる。

（１）アラビア語の学習

サウジアラビア教育省からの通達もあるため、週に１時間、全学年で「アラビア語」の授業を行っている。現地講師はエジプト人の女性（サウジアラビア人の女性は労働することができないため）で、児童生徒は「あいさつ」を中心に会話の学習をしたり、単語の読み書きを熱心に覚えたりしていた。

先にも述べたが、アラビア語はかなり難しく、小学校低学年にとっては厳しい面もあったが、子どもたちは、楽しみながらアラビア語を覚えていた。また、覚えたアラビア語を買い物の際に活用したりする子もいたようだ。

アラビア語は、30 種のアルファベットと 10 種類の数字で表される。一つ一つを見ても、独特な形をしており、書き順からしっかりと学ばなくてはならない。また、アラビア語は右から左へと横書きされるので、ここにも抵抗感を感じさせられてしまう。さらにアルファベットを連結させて表記するので、日本語の草書体のように一筆書きで書かれる。「ミミズがはっているみたい」という表現を子どもたちはよくしていた。

また、方言が多いことも難しさを感じさせられる点だった。「フスハー」と呼ばれる共通語が存在しているが、サウジアラビアの中だけでもたくさんの方言が使われており、国が変わると、単語自体が変わってしまうこともあった。「水」は共通語では「マ（マァ）」と言うが、ジェッダでは「モヤ」と言った方が通じたりするのである。

（２）アラビックタイム～現地を知る学習～

現地理解を進めるために、ジェッダ日本人学校では、アラビックタイムという時間を設け、現地の文化や歴史、自然など、いろいろな角度から学習を行ってきている。その中で、サウジアラビアと日本との結びつきなどについても一緒に学習することができた。

【現地の文化を知る学習】

①サウジアラビア日本留学生による講演会

サウジアラビア人の中には学生の時に日本に長期留学した経験を持つ者がいる。その方に来ていただき、日本語でサウジアラビアの歴史や文化について話をしてもらった。サウジアラビアの国旗には「アッラーは唯一の神であり、ムハンマドは唯一の預言者」とアラビア語で書いてあること。豚肉はけがれたものであるから口にしないこと。でも、日本にいた時チャーシューメンがおいしくて思い出にな

っているというちょっとした笑い話なども交えながら講演をおこなってくれた。児童生徒が疑問に思っていたことも日本語で答えてくれたので、現地理解を深めることができた講演会となった。女性の衣装についてや、日本のアニメ・漫画が今サウジアラビアでは流行っている事。アルコールはイスラム教ができてから最初の１０年は禁止されていなかったことなどなど、子どもたちにとって興味が深い話題が多く、驚きの声を上げる子も少なくなかった。

②アラビア料理に挑戦！

アラビア料理の中でも、比較的有名な「サンブーサ」作りに挑戦しながら、アラビア圏の食べ物について学習する取り組みを行った。アラビア語のエジプト人講師に依頼してアラビア語の授業の延長という意味合いで行ったので、多くのアラビア語単語を用いながら、児童生徒は楽しみながら活動を行っていた。出来上がったサンブーサを試食して、日本の料理との違いを感じたり、日本の〇〇の味に似ていると共通点などを発見したりすることもできた学習となった。学習後、家でもう一度チャレンジした子もたくさんいた。

③日本人ムスリムとの学習“ハッジ巡礼に参加して・・・”

ハッジの巡礼で「何をしているのか？」という疑問を解決するために、日本人ムスリムの方に来ていただき、学習会を開いた。イスラム教の教えに関しては、見たり聞いたりすることが多いので、児童生徒の関心も多く、いろいろな疑問を持っている。その中で「ハッジ」についての理解を深めるために学習会を開いた。「なぜ、マッカに行くの？」「カーバ神殿には何が入っているの？」「どんなことをしているの？」などストレートな質問にも丁寧に答えてくださったので、また一つイスラム教について深く知るきっかけにもなった。

【現地を知る学習】

①日本への輸出 No.2 は養殖エビ

ジェッダの南には広大な土地があり、その海沿いでは「エビの養殖業」を行っている。原油の次に輸出量が多いということもあったので、現地理解の一環として「エビの養殖場見学」に行った。池での養殖の仕方から加工・箱詰めまでの過程、日本輸出用のパッケージまで全てを見学させてもらった。広大な土地、雨の少ない気候など養殖に適した条件が整っている事、いろいろな国の技術が取り入れられている事も知ることができた。

②日本からの輸入「車を運ぶ船」の見学

ジェッダには大きな港があり、そこへは、海外からいろいろなものが運ばれてくる。日本から運ばれたたくさんの車もこの港へ入ってくる。その船がどのようなもので、どのようなコースでジェッダまで来ているのか。また、どんな工夫や苦労があるのかを知るために、実際に船の見学を中心に学習することができた。まずは、日本から出港した船を海外で見ること自体が大きな驚きであったが、運転席にある地図を見ながら、コースを確認したり、たくさんの車を傷つけずに運ぶ数々の工夫を発見したりすることができた。

③サウジアラビアの水

サウジアラビアでは、水は大変貴重なものである。その貴重な水がどのように作られているのかを知るために「海水淡水飲料化工場」への見学を行った。まず驚くべきところは、この国では、生活に必要な水を海水から作っているということだ。雨が少ない、川がないということから日本のように浄水場で水が作られているわけではなく、海水を真水に変えている。この見学では、海水をどのようにして真水にしているかを見ることができた。そしてまた、ここでも日本の技術が使われていることを発見することができた。

その他にも、歴史を学ぶために「Old Jeddah」と呼ばれる歴史保存地区へ見学に行ったり、郊外の小砂漠で、ジェッダには少ない砂漠というものを体験したり、身近にある紅海へ行き、海の生き物を観察したりと、いろいろな視点から現地理解を進め、深める活動を行ってきている。

（３）英語教育の充実

保護者からの強い要望もあり、アラビア語圏だが、英語の学習にも力を入れていた。現地採用講師による週２時間の英会話。オリジナルのテキストを使って行う朝１０分の英会話学習。さらに、文法的なことを身につけるための英語の授業も週２時間おこなっている。身に付けた英語の力を、交流学習（韓国校・ｺﾝﾁﾈﾝﾀﾙｽｸｰﾙなど）で発揮することができるようにもなった。

（４）日本文化を大切に・・・

海外の地にいるからこそ、日本の文化に触れることを意識して行ってきた。授業ではなかなかできることがなかったが、児童生徒会行事で、「こいのぼり集会」「七夕集会」「豆まき集会」を行い、行事の由来を調べたり、行事にあった作品を作ったり、ゲームを考えてみんなで楽しんだりすることができた。また、紅海に学習に行った際には、海のイベント「スイカ割り」を体験させたり、音楽では「和太鼓」の演奏に継続して取り組んだりするなど、一年間を通して、「日本文化に触れる」ということを意識した取り組みを行ってきている。

現地の植物を生かした七夕のかざりつけ

５．社会科の学習の中で行った現地理解教育

３・４年生の社会科の学習では、『地域』に着目して学習を進めていくため、今まで住んでいた地域（日本）と現在の生活とを比較させながら学習を進めることが可能であった。そこで、『身近なところから謎を解き、日本との共通点を探る』学習展開や『日本とサウジアラビアとの違いを見つける』学習展開を試みた。子どもたちは、日本との違いに驚きながら現地の文化や生活を調べたり、共通点を見つけて、サウジアラビアを身近に感じたりしながら学習を進めていった。

（１）「買い物はどちらがしやすいだろうか？」（３年：『スーパーマーケットではたらく人』）

サウジアラビアには数多くの品物をそろえた大型スーパーがあり、日本人家庭のほとんどがそのスー

パーを利用している。そこで、この単元では、サウジアラビアと日本のスーパーの違いを見つけるために、『どちらが買い物しやすいか？』という課題からスタートし、家庭にアンケートをお願いして調査活動を行った。

子どもたちは、学校行事の際に買い物にも行っているので、サウジアラビアのスーパーの大きさや品物の数の多さ、日本との買い方の違いなどをある程度おさえていたが、改めてアンケートを行ったことにより、数多くの違いを知ることができた。また、違いをおさえる中で日本のスーパーの良い点を数多く見つけ出したり、システム（発注・輸送など）の素晴らしさに驚いたりもした。さらに、『鮮度』という点では、日本とサウジアラビアでは大きな差があったので、児童は、「なぜ、日本の野菜や魚は新鮮なのか？」という課題を自ら作り上げ、熱心に調査することができた。

（２）「ゴミの捨て方の違い」（４年：『ごみのしょ理とりよう』）

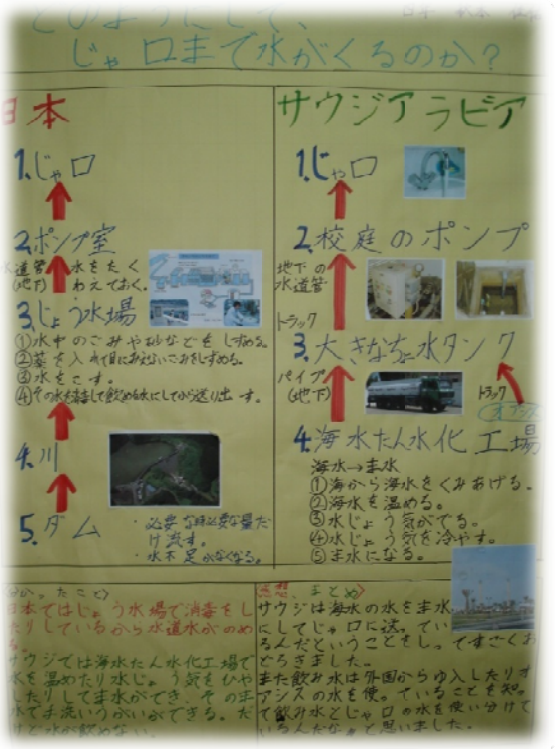
この単元では、まず、サウジアラビアではゴミの処理がどのように行われているかについて調べる活動からスタートした。家から出たゴミは、道端にあるゴミ捨て場に集められ、ゴミ収集車によって運ばれるところまでは簡単に追求できたが、『日本ではゴミを分別しているのに、サウジアラビアでは全部一緒に捨てている』という違いを発見し、ゴミの捨て方の違い・ゴミの行方を調べていくことにした。（サウジアラビアでも近年リサイクルが始まり、ビン・カン・ペットボトルを分別するようになってきているが、日本とは大きく違う）残念ながらゴミが捨てられているところを見学することはできなかったが、記録写真を探っていくと、サウジアラビアでは航空機の機体までもが一緒に捨てられているという、衝撃的な写真を見つけ、日本との大きな違いを知ることができたとともに、『サウジアラビアは国土が広い（土漠や砂漠がたくさんある）から、このようなことができるが、日本は国土が狭いので、同じことはできない。だから分別やリサイクルをすること、ゴミを減らすことが大事である』という結論にも達した。「ゴミの捨て方の違い」を入口として、「ゴミを減らすことや分別・リサイクルの大切さを知る」という部分にまで到達させることができた。

（３）「なぜ、水を飲まないの？」（４年：『水はどこから』）

「水はどこから」では、『日本の水（蛇口から出る水）は飲めるけど、なぜ、サウジアラビアでは水（蛇口から出る水）を飲めない（飲まない）の？』という問いからスタートし、日本の上水・サウジアラビアの上水、それぞれについて「水の旅」を調査した。

サウジアラビアでは、水は大変貴重なものである、時期によっては水不足にもなり、学校も断水することがしばしばあった。しかし、上水は完備されており、学校や各家庭には日本同様に数多くの蛇口がある。ところが、飲み水は必ず購入しているため、その部分に着目させ、『水はどこから』『どのような方法で』運ばれてくるのか。そして、『飲める・飲めない（飲まない）の差は何なのか？』を探る学習活動を行った。

まずは、学校の水がどこから、どのように来ているのかを調べることにした。ここでは、現地職員のアフメド氏にインタビューしながら調査する方法を取り、学習で身につけてきているアラビア語や英語での会話も取り入れながら、学校内の水の通り道をおさえた。校外の部分に関しては、ジェッダ日本人学校が持つ副読本『わたしたちの住むサウジアラビア』を使って調べたが、古い資料であったため、内容をアフメド氏に確認したり、実際にアフメド氏と校外に出て、水の通り道を教えてもらったりしながら調査活動を進めた。先にも述べたが、水はこの国では非常に大事なものであるため、貯水場などは大変厳しい警備がおこなわれていた。



子どもたちが一番驚いたことは、学校の水（サウジアラビアの上水）は海水から作られていることであった。海水淡水化工場という水を作る大きな工場がジェッダにはある。普段は何気なく見ていた工場だが、ジェッダ市民にとっては欠かすことができない工場であることが分かった。「ジェッダには川がないから、わき水を集めているのではないか。」という予想を立てていたので、衝撃も大きかったのではないかと思われる。

日本については教科書を中心に調べ、浄水場で繰り返し消毒されたり、検査が行われたりしていることに着目した。ここにポイントがあるかもしれないということで、ジェッダにある海水淡水飲料水化工場（SAWACO）へ見学に行く際に確認することになった。

この工場では、海水を飲料水に加工し、トラックで運んでいる。作られた水は、コンパウンド（外国人集合住居）では飲み水として使われたり、ジュースの原料として使用されたりしている。見学をしていく中で、海水がどのように真水になるかについて知ることができたとともに、「検査」や「消毒」がしっかりと行われていることを知ることもできた。

子どもたちは、見学を行うことによって、ジェッダの水事情を知るとともに、飲料水になるかは、日本と同様「検査」や「消毒」をしっかりと行っているかどうかという部分で決まってくることもわかったのではないかと考えられる。

この単元では、サウジアラビアの水について学習を深めながら、日本の浄水場についても関心を持って学習を進めることができたのではないかと感じている。また、学習の最後には、「日本でも海水を真水する工場があること」を見つけ出したり、現地（サウジアラビア）人の中には、日本同様、蛇口に浄水器をつけて飲んでいる人がいることを聞いたりするなど、学習の発展や深化にもつなげることができたことも良かった。

（４）サウジアラビアの昔の道具（４年：『古い道具と昔のくらし』）

『古い道具と昔のくらし』では、「古くから残る暮らしにかかわる道具、それらを使っていたころの暮らしの様子」などを調べるために、サウジアラビアで使われていた道具について調べる学習からスタートさせた。日本の古い道具は、なかなか手に入らないという現状もあるが、現地理解を進めていくことができる機会とも考えた。

写真①

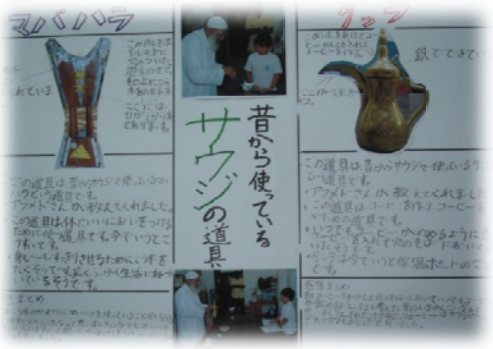
写真②

導入には、子どもたちが見たことがある道具であり、ベドウィン（アラビア半島で昔からの生活を変えずにいる人々）の生活で使っている道具（写真①・②）を提示し『これは何だろう・何に使う道具だろうか？』という問いかけから切り込んでいった。子どもたちは、見たことがあるが、注意してじっくりと見たことがないため、まずは、副読本『わたしたちの住むサウジアラビア』を使って調べてみた。しかし、副読本では「マバハラ（写真①）」「ダッラ（写真②）」という名前だけしか分からず、使い方や何のために使っているのかは謎のままであった。

そこで、現地職員（アフメド氏）にインタビューしながら解決する方法を、ここでも利用し、現地理

解を進めるため解決方法の一つとして定着を図ることも試みた。また、アラビア語を活用する機会としてもとらえて行うことにした。

アフメド氏とは、事前打ち合わせで、『何のために使われているか。』、『今、この道具に変わるものは何か。』の２点について必ず話をしてもらうようにした。これは、昔の道具に注目するだけでなく、道具はより便利なものへと移り変わっているということも一緒におさえたかったからである。



実際にインタビューした時も、マバハラを使って香木をたいてもらったりするなど、その場で使い方を実践してもらったので、貴重な体験にもなった。子どもたちの関心も大変高いものとなり、マバハラを土産として日本に買って帰ったり、日本の昔の道具調べにも意欲的に取り組んだりすることができた。

また、日本の昔の道具を調べる際にも、「今はどんなものに変わってきているのか。」という点や、日本でもサウジアラビアでも道具が便利になっているという共通点を見つけ出すことができた。

海外の地では、日本のように必要な教材がなかなか手に入らないが、現地のものを上手に教材化することができれば、子どもたちに高い関心を持たせながら、学習のねらいをおさえた授業づくりができることがわかり、自分自身にとっても大変貴重な経験となった。

６、終わりに・・・

サウジアラビアで３年間は、常に驚きと発見の連続であった。イスラム教という盛大で神秘的な宗教との出会い。気候や文化が全く違う生活。そのような中にある日本人学校。学ぶべきことが本当に多く、いろいろな分野で刺激を受けることもできた。

そして、私が一番印象に残っている事は、当然のことではあるが、それぞれの国にはそれぞれの文化や歴史があり、それを大事にしている国民がいること。自分たちの言葉を大事にし、自分たちの生活に誇りをもっているということだ。それを肌で感じることができたことは、貴重な体験でもあった。さらに「自国の文化を大事にしているからこそ、他国の文化も尊重できる」という言葉をよく聞いたが、まさにその通りであるとも感じた。

また、実際に見たり、聞いたりすることの大切さを改めて感じることもできた。子どもたちの理解を深めたり、興味を広げたりするには、「単元の導入で如何に引き付けるか。」ということが最も大事になってくる。そして、そのためには、その国の素材を有効的に教材にしていき、子どもたち自身が「見る」「聞く」という活動を通して現地理解を深めていくことができるということも授業実践で学ぶことができた。

この貴重な３年間の経験を日本に戻ってから少しずつ還元していくとともに、自分が授業を構築していく上でも忘れないようにしていきたいと考える。